

# 令和元年度 第1回弥富市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和元年11月15日(金) 午後1時30分～

2. 出席者 市長 安藤 正 明  
教育委員会  
教育長 奥 山 巧 教育長職務代理者 伊 藤 昭 三  
委 員 浅 野 美喜子 委 員 鈴 木 由 美  
委 員 阿 部 康 治

3. 説明者 教育部長：立松則明 ・教育部次長：伊藤武司 ・学校教育課長：渡邊一弘  
・生涯学習課長兼総合社会教育センター館長兼十四山スポーツセンター館長兼南部コミュニティセンター所長兼白鳥コミュニティセンター所長兼十四山公民館長：山森隆彦 ・図書館長：服部朋夫 ・歴史民俗資料館長：伊藤隆彦 ・学校教育課主幹：藤澤太一

4. 議 題 (1) 令和元年度全国学力・学習状況調査結果について  
(2) 不登校児童・生徒の状況について  
(3) 意見交換について

5. その他

.....○.....

1. 開会

○ 学校教育課長より それでは失礼いたします。少し早いですが皆さんおそろいなので会議のほうを始めさせていただきたいと思います。それでは只今より弥富市総合教育会議を開催いたします。始めに安藤市長よりご挨拶をお願いいたします。

.....○.....

2. あいさつ

○ 市長より 皆様、改めましてこんにちは。市長の安藤でございます。本日は大変お忙しい中、令和元年度総合教育会議にご出席を賜りまして本当にありがとうございます。晩秋を迎え朝晩めっきり冷えてまいりました。山はもちろんのことでございます

が、町の中の紅葉も鮮やかになりつつあるわけですが、そんな中、あと今年も残り1ヶ月半となって参りましたがそれぞれご自愛を賜りますようよろしくお願い申し上げます。また教育委員の皆様には日頃より弥富市の教育に対しまして一方ならぬご尽力を賜っておりますことに厚くお礼を申し上げます。さて、私事ではございますが市長就任まもなく1年を迎えようとしております。これまで各種行事で学校を訪問させていただいた折に校長先生方とお話をする機会がいろいろとございました。そこから伝わってまいりますのはやはり生き生きと学校生活を送る子供たちの様子であり、また子供たちの健やかな成長を願う、日々奮闘する先生のお姿でございます。本日の会議は弥富市の教育の現状と課題、そして将来ビジョンを話し合う場です。弥富市の子供たちの未来に向けて有意義な意見交換になりますことをお願いいたします、挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

.....○.....

### 3. 議題

- 学校教育課長より     ありがとうございました。それでここからの議事の進行につきましては、この会議の招集者であります安藤市長にお願いいたします。
- 市長より     はい、それでは議事のほうを進行させていただきます。始めに議題1でございますが、「令和元年度全国学力学習状況調査結果について」、事務局から説明をお願いいたします。
- 学校教育課主幹より     はい、失礼いたします。学校教育課主幹の藤澤でございます。私のほうから「令和元年度全国学力・学習状況調査結果について」述べさせていただきます。ここから着座にて失礼いたします。まず始めにお配りさせていただいた資料の色刷りになっている結果一覧をご覧ください。見方といたしましては、一番上、上段に令和元年度、続いて30年、29年、28と追って過去のものが掲載されております。学力学習状況調査については皆様もご存知の通り、本市における子供たちの、いわゆる学力が全国の子供たちと比較して、あるいは県の子供たちと比較してどのような位置にあるかということのを推し量るべく行われるものでございます。この後、分析の結果について述べさせていただきますが、そこから見えてくる課題と、場合によってはその課題に対してどう対策、対応を図って今後の教育活動につ

なげていくかが見えてくるかなと思います。上の令和元年度の表を見ていただきまして、上太字になっている部分、全国の国公立私立全てを合わせた生徒の数。続いて児童数。続いて全国の公立に在籍する児童の数、続いて愛知県、弥富市となっております。愛知県の児童数の右側を見ていくと、国語算数それぞれの今回推し量った教科についての得点率を示しております。全て得点率なんですけど、愛知県だけは○数字で、数字が入っております。例えば国語で言いますと、59の下に47。これは全国の県ごとのいわゆる得点率と比較したときの全国順位でございます。実は47都道府県でございますので、愛知県の子供たちの得点率は全国で最下位ということになります。算数は33位。そんな形で見ただけでいいかなと思いますが。では弥富市はどうかと言いますと、国語については愛知県の得点率に比べるとやや高い値を示しておりますが、全国に比べると見ての通り低い。算数については愛知県に比べて、全国に比べて同等もしくはちょっと高い。微妙なところなんですけど。実は全て整数数字になっておりまして小数点以下が四捨五入してありますので、全国で比較するときには小数点第何位というのがわかりにくい部分があるんですけど、一応こういった順位でございます。そして二重線から下の部分に各学校のそれぞれの得点率が示されておまして、少しだけ見やすくというつもりで赤字、後ろの赤の網掛けになっている部分が、愛知県平均よりは高い得点率を示しているところというふうになっております。一読していただくとそれぞれの学校の特徴も出てきておりますし、弥富市としてということも出てきているのかなと思います。続いての面をご覧ください。同じく中学校でございます。詳細な分析結果については、その後の資料の中でお話をさせていただきますが、見ていただいた通り中学校に上がると愛知県平均も比較的高く、かなり上位にきております。そして愛知県平均よりも弥富市はやや上回っている、失礼しました数学ですね、失礼しました、数学は上回っていますが、国語は若干下かな、英語は同等かなというような見方をさせていただくと結構なんですけど、一応こういったような状況が今わかってきております。では続いて分析結果のほうをご覧ください。ちょっと時間をいただきまして。まず弥富市の状況ということでお話をさせていただきます。実は今日、午前中に派遣指導主事会というものがございまして、その場に本当に折しも今日なんですけど愛知県の義務教育課の指導主事の先生がみえて、愛知県の児童の様子をお伝えくださったんです。その資料は急には用意できなかったんですけ

れど、ちょっとそこでお話があったことも織り交ぜながら説明をさせていただけるといいなと思っておりますのでお聞きください。まず小学校の国語ですが、国語は全国平均より下で県平均より高い位置にいるということがわかっております。それから全ての評価観点において残念ながら全国平均を下回り、県平均を上回っているというふうでございます。いいところが○印、ちょっと課題が残るところが▲印で示されておりますが、1つ目の▲ですね。全国県平均と比較して弥富市の子供たち（小学生）は書く能力が低いということがわかってきております。実は書く能力の低さはここには具体的な文章や数値では示されておきませんが、県全体としても全国平均と比べると低いということがわかっております。併せて2つ目の▲。国語についての知識理解技能が低く、特に漢字を正しく使うことができていないということがわかっております。☆印のところ少し対策として書かさせていただきましたが資料を活用し情報収集の範囲や活用方法を広げる学習を積極的に設定していかないといかん。実は後ほど述べさせていただこうと思っておりますが、弥富市の子供たち、本を読むことが好きと答えている子供たちが比較的高い割合にあるんですが、残念ながら本を読むことが即座に漢字の習得、あるいは言葉の意味の習得に結びついていないという現状もありますので、そのあたりただ読むのではなくということも課題かなと私は感じております。続きまして小学校算数です。算数は先程の一番最初の色刷りの表で示させてもらった通り、県平均を上回っております。概ね全国平均も上回っておりましてなかなかいい傾向にあるんですが、ちょっと県の義務教育課の方がお話されたことと、ちょっと違う傾向の部分がありますので見ていただきたいです。1つ目の○です。図形に対する知識理解が高いです。ところが県平均で見ると、実は海部地区全体で言うと、実は図形は弱いと言われているのですが、この弥富地区においては図形については高いと。1つ目の▲。数と計算を図る設問の一部で全国平均を大きく下回るものがあると言われていまして、実はこれは愛知県としても同じような傾向が出ているということがわかっております。具体的にはという話になりますと、1つ目の☆。四則計算の仕方が調査結果により若干身についていない。先日来、学校訪問等で算数教育に力を入れている様子も伺っております。実際に朝の短い、ショートタイムといいますか、帯の時間と言うんですけど、15分の時間を利用して読書活動と平行して計算の特訓というか練習をしていると伺っておるんですが、またそのあたり継続的にやりつつ、計算

の仕方そのものを、特に四則計算のルール、約束等をきちんと理解させるような形で授業の改善に取り組んでいかないかなと感じました。併せましてここには詳しく載っていないんですけど、正答ももちろんそうなんです、誤答の仕方というものについてもいろいろ分析の結果が今日伺ってきまして、間違い方。特に四則計算。足し算、引き算、掛け算、割り算の降り混ざった計算の仕方の、計算の順序を正しく理解していない子供たちというのがその結果からわかったようで、そのあたりもしっかりできる限り小学校の説明の中で身につけさせていかないかなとちょっと感じました。ただ概ねで言いますと計算については比較的高い。全国平均と比べて高い傾向を示しているというふうに分析からわかってまいりました。続きまして中学校国語です。国語は全国平均、県平均より低いです。中学校、さきほど申し上げたように比較的どの教科においても高めの、平均よりはいい傾向に示されておりますが、国語についてはやっぱりちょっと低いかな。小学校と真逆な部分がありまして、話す聞くについて平均より下回り、逆に先程苦手とされていた書く能力については県平均を上回っているということがわかりました。対策についても下のほうに掲げさせていただきましたが、やはり手紙の書き方などを通して一般的な国語の表現技法を身につけるためにそういった体験の場を設定する等、そういった取り組みが必要かなということも考えております。それから登場人物の言動や地の文の陳述などを整理しまとめたりする学習活動がこの本調査から伺える現状には効果的かなということも考えております。今どの学校でも多く取り入れられているんですが集団討論やテーマに則した話し合い学び合い、このあたりは私も学校訪問で回らせていただく折に、あるいは様々な主任さんが集まる会議に参加した折には、そのあたりのことを重点的に取り組んでいただけるよう話をしたいと思っております。続きまして数学です。あ、すみません、もう1個、付け加えたいことがございました。国語の話で中学校の国語と小学校の国語、特に小学校の国語の、こういう言い方をすると語弊があるかもしれませんが低く示されている一因のひとつにもしかすると外国人生徒の、外国人児童の存在があるかもしれない。このあたりは少し県のほうでも触れられておりました。実際に弥富市には他市町だけでないですね、他府県、他国ですかね、外国から移住者が多いですので、そのあたりがもしかするとこういうところに反映されているかもしれんなということも。実際、愛知県自体も他の都道府県に比べまして大変外国人児童生徒数が多い県で

すので、そういったところも結果には反映されとるかもしれないということは、根拠がないと言えないんですけど、実際そのあたりも反映している可能性があるということとは頭のどっかにとどめておいていただけるといいかなと思います。話を戻します。中学校の数学です。数学については先程も述べさせていただきましたように、中学校に大変高い、良い傾向が見られております。ただそれでも、先程の小学校の算数と同様に特に正答もそうなんですけれども、誤答、間違いのほうにしっかり目を向けて、その弱いとされている部分を各項においてしっかり分析しながら授業改善に取り組んでいただくということは併せて伝えていきたいと思います。続きまして英語でございます。英語ですが、実は予想よりも良かったというふうに言われております。結果からは平均並みというふうにも、平均よりも少しいかというくらいと言われていたんですが、実は数年前、3年前ですかね、英検3級の取得率というものを調べた調査があったそうです。ごめんなさい、その資料はこちらにございません。調べたときに、愛知県、英検3級取得率、非常に他の他府県に比べると低いから、イコール英語弱いんじゃないかなと言われていたんですが、実際今回初めて英語が導入されてやってみたところ、意外と、と言ってはあれなんですけれどもいい傾向にあったと言われております。それでも課題とされる部分はいくつかありまして▲で書いてあるように日常的话题については情報を正確に聞き取ることができる力はやっぱり弱い。文の中で適切に接続詞を用いるという文法的な書く力も弱いと言われております。課題とされている部分をしっかり見極めながら、今後も英語学習についても力を入れていかないかなんかと思っております。教科については以上、国語、数学算数、中学校については英語も分析をさせていただきました。この後、この下に少し学習に関連して、生活にも関連して、児童質問紙から見られている傾向というものをご承知いただきたい。ちょっと少し説明させてください。まず弥富市の子供全般的に、小中合わせて言いますが困っている人を助けていこう、規範意識はけっこう高いということが感じられます。先程も述べさせていただいたとおり読書をしている子供たちの割合は比較的高い。割とよい。ただ先程述べさせていただいたとおり課題がまだあります。それから今度よくない部分なんですけど、弥富市の子供たち、比較的、小学校は自己肯定感が低い子が多い。自信がないというんですかね。中学校においては自己肯定感が高いんだけど夢や目標を持っている生徒が少ない。将来に対する展望、見通しが明るくな

いという、言い過ぎかもしれませんが、そういう子供たちが多いことがわかっております。これは授業にも関連してくるんですけど、子供たちの感覚として最近導入を進めていただいております、ICT機器、いわゆるパソコンや実物投影機等といった機材を使った授業があまりやられていないんじゃないかなというのが、子供たちの感覚でございます。次のページをご覧ください。それと併せましてなんですが、学校の教員のほうにも同じ質問をしてみると、上から3つ目の▲、小学校のやつを見ていただくと、児童に対し将来就きたい仕事や夢に対して考えさせる指導があまり行えていないという自己反省が出てきている部分があって、このあたりは「夢を見させてください」と口で言うのは簡単なんですけど、いろんな体験を通して将来の展望を明るく持たせるということが大事だと、教員の側にも伝えていかないかなと思います。それからこの小学校の下から3つ目の▲の教員が大型提示装置のICTを活用した授業を行う頻度が低いと。導入は進んでおります。ただ実際の活用においてはまだ若干、研修不足とは言い過ぎかもしれませんが、授業の中でうまく組み込めていないという現状も少しあるのかなと思っております。このあたりは私達自身の教育委員会としての課題かもしれません。また折を見て、そういった指導にも回っていきいたいなと思っております。中学校のほうもご覧ください。あくまで中学校の結果なんですけど、中学校の先生達は逆にICTは割と使っていると自信を持っています。また子供たちとの思いとのギャップはありますので、このあたりもう少し分析が必要かなと自分も考えております。それから▲の中学校分の一番上。同じように将来就きたい仕事や夢に考えさせている指導があまり行われていないと。まずは先生方の意識改善を図っていく必要があるのかなと思いました。私としてキーワードとして5点にまとめさせていただきました。1つ目は先程から申し上げているように「将来の夢を語る授業の推進」これはもう絶対、不可欠だと思います。併せて学校教育目標をベースとしたカリキュラム。言葉尻、難しそうな部分が並んでおりますが、理想として掲げる子供像を元に各教科しっかりと明確な目標を立てて、その目標の達成のために授業改善に取り組んでいくというような形で、またこちらのほうについても様々な機会に話し、伝えていきたいと思っております。それから「論理的思考力の育成」ということで、これ実はICTの活用にも関連してくるんですけど導入したパソコンや機材をうまく使って物事が論理的になし得ているんだということを理解させる。そういった教育も進めていかないか

んなと思っています。5点目にも通じる部分もございますがICT機器の活用促進、有効活用のための授業研究をどんどん進めていかないかなと思っています。時間をとってしまって申し訳ない。以上が全国学力学習状況調査からの私の分析と課題、それに対する対処でございます。以上でございます。

- 市長より はい、ありがとうございました。今、調査結果についてショッキングな部分もありますし、また内容について説明をいただいたわけではございましたがこれにつきまして何か意見ご質問等がございましたらお願いいたします。どうでしょうか。奥山教育長。
- 教育長より 毎年ちょっと話題になつとるんですが、大藤小学校が毎年なかなか学力の定着の成果が出ないと。人間も変わっていくもんでね。しかし毎年というのもちよっとおかしいもんで。この前、校長先生に、こういう比較表というのは校長先生は持ってみえないもんで、自分のところの資料しか持ってみえないもんで、あまり他校と比較することは無いんですけれども、「実は毎年成果がちょっと見られないんです」ということを相談しました。そうすると、今の校長先生は今年来た校長先生でして「やっぱりですか」と。「それは先生、どういうふうに感じられました」と言ったら「僕はここに来て、本当に行事に力を入れるのはいいんですけれど、力を入れすぎて授業に食い込んどる」と。「これはええのかなとずっと思っておりましたけども。例年通り、運動会やら学習発表会やらいろんな行事を一生懸命やっておる。地域の人にはすごく喜ばれておるんだけど、そのバランスが、これでちょっと自分も感じておったけども、わかりました」ということで「来年からいっぺん行事の見直しと、学習の定着というのを早急に。やっぱり子供の力をつけるというのは大事ですので、やっています」ということを言ってみえました。
- 市長より 他にご意見がありましたらお願いいたします。
- 委員より 毎年、これ、全国全ての学校で実施されているということで、ある意味で比較対照するということがとても大事な部分だと思いますけれども、ここにあるように1番だから良くて、47番だといかんという発想で見ってしまうと、非常に地域の実情というのがあってのあれですので、単純に比較する、点数がいいというだけでは、私はこれの見方というのは、必ずしも全面を表現しているものではないなと前から思っているんですが。むしろ他の県だとか他の市と比較するよりもこの地区はどう



いう問題点があるのかと。本校はどういうところにもっと力をいれなきゃいけないかというところに焦点を絞っていく必要があるなと思います。小学校と中学校で愛知県ほど傾向が違うところもないんですね。小学校はとっても低いけども、中学校にいくとかなり高いところにおる。これも不思議なんですけれども、さっきも話に出ました、外国人児童生徒が多いということが、特に国語なんかは非常に影響力があるんじゃないかということもあるし、その子達が慣れてくると、そのことがあまりハンディキャップになってこないのかなという、そういう見方も中学校の場合にはみえるのかなと。もちろん中学校の子供たちが頑張っているということも言えると思うんですが。いろいろ多面的に見なきゃいけないし。子供たちや先生方の意見というんですかね、後ろのところに出ている、ここんところは、分析みたいなところは大事にして、日頃の指導に戻していくということはぜひやっていただきたいと思っています。単純に学校がここが良くて、ここが悪いということは言えんけども、毎年同じ傾向。さっき大藤小の話が出ましたけども、これはやっぱりちょっと学校経営だとか指導に問題があるんじゃないかという、そういう指摘の部分には活かせるんじゃないかなと思います。私達、僕が教員をやっていたころは、こういうものが学校の評価の一番大きなものであったという気がしますし、結果を出すことがとても大事だというふうで皆ガリガリと絞ったというような時代があったんですが、多様性がいろいろ求められる時代ですので、平均点で見るとはそれぞれの子がどんなに頑張っているかというような観点や、これから先どう頑張っていくのかということも大事にしたいなと私は思っております。以上です。

- 市長より はい、ありがとうございます。大藤小学校、特別外国人の生徒児童は。
- 教育長より ほとんど居ないですね。弥生小が一番多いんですけど、弥生小そんなに悪くないんですよ。弥生小40人くらいおりますのでね。
- 市長より 学校のこれまでの特性みたいなものがあるんですね。
- 委員より あの、ある講演で聞いたことがあるんですけど、だいたいいつも青森とか、あっちのほうが一番とか、秋田とかが一番とか2番なんですよ、全国の。その学力検査の全国のトップレベルの県ほど過疎化が進んでいると。要するに成績優秀で県外へ、関東とか、関東が一番多いと思いますが、そっちに行って戻ってこない。要するにレベルの高い学校に行って、帰ってこなくて、そっちで仕事を見つけ

て、どんどん人口が減っていくという傾向があるので、あまり成績がいいと弥富も皆出てっちゃう可能性も無きにしもあらずかなと思って。

- 市長より そっちですか。難しいというか、それは程々にとはなかなか言えないもんですから、弱いところはやはり伸ばしていかないかなとは思いますが。ほかに何かご意見があれば。よろしいですかね。ありがとうございます。それでは議題1につきましてはこれで終了させていただきます。続きまして議題2の「不登校児童・生徒の状況について」事務局から説明願います。
- 学校教育課主幹より はい、それでは引続き本市における「不登校児童・生徒の状況について」も述べさせていただきたいと思います。これもしかすると、この私の不登校児童生徒の状況等のお話をさせていただいた後に、学力状況調査についてもちょっと関係してくるのかなと思われる方もみえるかもしれませんが、またそれは後ほど。まず、表になっている不登校児童生徒の状況の一番最初のものをご覧ください。特に網掛け等しておりませんのでやや見にくい感もごさいますが、平成29年度、昨年度平成30年度、そして本年度はまだ途中なので、比較対象にはならないんですけど、現在のところという部分で集約させていただいた表でございまして。ご覧になっていただいて、まず目に飛び込んでくるものとしては29年度の総不登校数、30年度の総不登校数、令和元年度に関してはまだ現在途中ではあるけれど、総不登校数をご覧ください。そうしますと29から30に不登校数が増えているということが明らかにわかるのかなと。令和元年度については、もちろんまだ途中ではございまして、なんとも言えない状況ですが、もうすでに中学生においては平成29年度よりも増えている状況が見えております。あの不登校数の計上の仕方なんですけど、その年度に欠席数が、一番上に書いてありますが、30日を超えた子供を不登校として扱っております、さらに（ ）内は、その人数の中の何人かが90日以上。つまり、平成29年度の小学校男子4年生を見ていただくと、「2（1）」となっているのは、2人のうち1人は90日以上欠席したということを示しております。この「30、90」という規定についてはもともと文科省の統計の資料の上げ方で出ている数値で、ごめんなさい、私は勉強不足でその「30、90」といういわゆる基準というものが何を根拠としているのかわかりにくいのですが、もしかしたら教育長先生がご存知かもしれませんが、この30と90という日にちを追っていくんですけど、実際のと

ころを申し上げますと90日を超えている児童生徒というのは、ほぼほぼ、年間に授業日数は約200日小中、ございますが、ほぼほぼ学校を休んでいるという傾向にあるのも事実でございます。それから併せましてこの表だけで話をさせていただきますと、今、それぞれの年度の下にですね、今鍋田地区に開設されております適応指導教室、つまり不登校になってしまったけれどなんらかの形で学校に行く足がかりにしたいということで開設している、適応指導教室「アクティブ」のほうに入室してる児童生徒数を示しております。29年度は小学校4名、中学校10名。30年度は小学校6名、中学校13名。微増ですが。そして令和元年度については今現在は小学校2名、中学校13名ということで在籍しております。若干アクティブの入室数も増えつつあるのかなというのがこの現状でございます。では引き続き、次のページをご覧ください。後ほどの分析のほうでまた私の考えを述べさせていただいていると思っておりますが、これは個人情報にかなり関わる部分で、今現在学校から上がってきている不登校児童生徒の一覧でございます。弥富在住の皆様からすると、もしかすると名前を知っているあの子がというのがいるかもしれません、今これが現状でございます。特に色付けしてあるのはこれ実は先回の定例の教育委員会の資料を利用させてもらっていますので、その月に現れたものということで色付けをしているんですが、よくよく目を凝らしていただくと、不登校の計上、先程も言ったように、年度始めから数えるので、どうしても4月には計上されてきません。5月もほぼ計上されることがなくて、5月から6月にかけてぽつぽつ出始めるということを見ているんですが、9月に入ると急増しているということ、ちょっと見にくいんですけど、表からおわかりになると思います。そしてこれも課題ではあるんですけど、備考1のところをご覧ください。私が調べた限りでございますが昨年度の欠席数、わかっているので全て載せさせていただきましたが、昨年度、不登校として計上されてる欠席数の多い子はだいたい本年度も欠席が続いているという状況です。併せてアクティブに入級している児童生徒についてもそちらに示させていただきました。これ令和元年度の資料でございますが、単純に数えてみても小学校2人はわかるんですが、中学校はこちらには8名、でも実際には入室13名。あれっというふうになるかと思いますが、この次の分析と課題のところ載せさせていただきました。では次のところをご覧ください。分析ということで、先程来、説明させていただいているように、不登校者数は増加の

傾向にあります。残念ながら増加傾向になります。それから不登校出現率ですが、これは平成30年度のデータ。本年度は出すこともできるんですが、途中なので。30年度のデータを見ていくと、小学生においては0.79%、中学生は4.2%。こちらに示してもよかったんですが、県の出現率に比べて、県の出現率は小学生は0.8を超えていましたので、小学生はあまり不登校は出ていない。ただし、中学生は県の平均は、確か3.8~9だったので、中学生は実は県平均よりも不登校数が多いんです。そこまで示せばよかったんですが、そういう傾向があります。不登校者の出る割合は中学校のほうが圧倒的に多いと記載させていただきました。それからアクティブの入室者数についても増加傾向にあります。平成30年度より、ここはちょっと私自身の引継ぎ兼ね合いも含めての課題なんですけれども、アクティブについては通っていれば登校扱いなんです。そのため、ここは捉え方はいろいろあるんですけど、いま現状、外にある外部施設でも通っていれば「登校」という扱いにするという部分でいうと、単純に「学校に通っている子」「通っていない子」って分けたときに見ていくと、私の分析なんですけど、「学校に行けていないよ」って子は29から30にかけては1.5倍くらいなんじゃないかなと、ざっくりですが、と考えております。学校に行けていなくても、適応指導教室に行けていけばいいよっていうお考えの方もいらっしゃいますし、やっぱりでも集団生活を営むってことを考えいくのであれば、やっぱり学校で基本的な生活習慣、もちろん学習についても学ばないかんよとする考えかたからすると、このあたりどうなのと自分は考えております。続いて小学校における不登校者数は横ばい、中学生の不登校者数は大幅に増えている。そして先程も述べましたが、前年度の不登校者の多くが翌年度についても不登校になるケースがある。統計の仕方にもよるし、仕方がない部分もあるんですけど、それでも長い休み、夏休みですね、明けた9月から10月について、不登校が出やすい傾向にあるということもわかってきております。今後の課題としては、これは私の統計の仕方の問題なのであれなんですけれども、アクティブの登校は通常の出席と分けて計上していかないかと思っています。今、学校に通学できていないということを明確にしないかと思っています。ただしこれは親向けにはありません。親向けには通知表上、アクティブに通ったらそれは出席扱いにしておりますので、あくまでも内部資料といえますか、子供たちの指導要領という部分に記載する際には学校ではなくて、いわゆる出席

なんだけど、いわゆる適応指導教室のほうに出席が1、実際には欠席という扱いにしていかないかと思っています。中1キャップの言葉の通り、やはり小学校から中学校へのスムーズな接続と、不登校者を出さないための取り組みということが必要かなと思っています。実際には小中学校間で様々な形で連携を図っております。小学生が中学校へ入学するにあたっての学校見学を催したり、もちろん保護者向けに説明会を催したり、中学校教員が小学校のほうに出前授業という形で出向いて行って、こういうふうに授業をするんだよということもやったりもしております。部活動の見学も行っておるんですが、このあたりも全て含めていろんな取り組みもまた、見直していく必要があるのかもしれない。それから不登校からの復帰者数。これは申し訳ないです。現状調査からはわからない部分があります。今のところそこを求めている部分がないので。今後、何を持って回復というのかちょっと難しいんですけど、以前に比べて、例えば週5日あるうちの、5日まるまるではなくて数日、2日ないし3日出てくるようになりましたよ。そこからもちろん改善して行って、毎日来るようになりましたよってなればいいんですけど、どこかである程度の線引を決めて、不登校から回復をしたよって子についても、まずは口頭での報告を促していきながら、なんらかの形で示せるようにしていきたいなと思います。なかなか難しい部分があります。一度復帰してもまた不登校になったりすると、じゃどこかがどうって話にもなりかねないので、またそのへんは自分としても分析する上で、統計を取る上での課題だと思います。適応指導教室アクティブが飽和状態になりつつあります。このあたりは行政といいますか、市に対して要望につながるとあれなんですけど、支援員の雇用数増を検討する必要があるかなとも考えておりますし、これはよし悪しがあるんですけど、現在はアクティブという適応指導教室が鍋田地区ですね、弥富の、実際は真ん中よりちょっと南くらいのところですけど、全体に子供たち、人が住んでいるところからするとだいぶ南部にあるので、弥富北中学校、十四山中学校の子供たちは通うことが難しい状態にあります。そうすると完全に不登校という形で家にいられない子が足がかりとする場所にもちょっと遠いなってことが、それが一つ、課題といいますか、考えていかないといかんという材料の一つかなと思っています。今後の取り組みについてですが、これ原因まで厳密に追求しきれていないんですけど、学習不適應者が不登校の一つの原因かなということは感じております。先程の小学校の平均得点率が悪

くて中学校は良くなるという穿った見方をするとちょっと問題があるかもしれませんが、不登校になると当然テストを受けられなくなりますからね。そうすると必然的に受けている子たちは得点率が伸びてしまうという見方もあるのかなというのが、あくまでも自分の見方です。ただそれでもやはり勉強が難しくなっておっつかん。勉強面白くない。こういうものも全くないわけじゃないと思いますので、一つの要因として捉える必要があります。もちろん不登校に落ちる原因、その他を多いものから数えていけばやはり人間関係。そういったコミュニケーションスキルの不足というか乏しさというのがもちろんあるんですが、やはり学力の面も見捨ててはおけないなと思っております。それから、これは当たり前のことかもしれませんが、不登校者が比較的出現しやすい節目の時期、つまり中学校への入学時点。それから長い休みを挟んだ後の9月。このあたりへの声掛けは切に訴えていきたい。実際訴えていないわけではありませんが、訴えていきたい。それから欠席数が増加し始めるときが一番鍵になるので、そのあたりへの定期的なカウンセリングを。もちろんカウンセラーもそうなんですけど、担任やあるいは学年に入っている教師から声がけを促していくことは必要だと。もちろん児童生徒だけではなくて保護者に対してもそういった取り組みが必要かなと感じております。それから不登校児童生徒への対策を熟慮した学校体制の構築ということで、陥ってはいないと思いますが、陥りがちなのが、担任が一人で抱えるということ。学年だけで抱えるということ。できるだけ学校の職員組織内で情報共有を図り、多面的な角度から担任その学年だけでなく、養護教諭やあるいは管理職、カウンセラーその他支援員を含めて、いろんな角度で声がけをし、登校を妨げないような努力はしていく必要があるなと思っておりますのでこういった声かけ、取り組みをしていきたいなと思っております。少し時間を取りましたが以上です。

- 市長より はい、ありがとうございました。ただ今、不登校児童生徒の状況について、また分析課題等について説明をしていただいたわけではございますが、これにつきまして委員の皆様からご意見がございましたらお願いいたします。
- 委員より 課題のところでも最後に書いてあるのですが、適応支援教室アクティブが南のほうにあるということと、そこに入りきれない状態になっているということで、昨年、一昨年くらい前に2つめの適応指導教室を作るという話があったと思うんですが、それが最近なくなってしまってもう1回復活させてほしいなと思っているん

ですが、どうしても人数の多いところの子たちが、アクティブに通おうと思うと、もともと学校に行くもあんまり得意じゃない子たちが、遠いところまでなかなか行けないもんですから、やっぱり人口の多いところに作ってあげることが必要ではないかなと思います。津島市にも2つありますし、蟹江にも2つあるんです。なので弥富市も分けられるように2つあってもいいんじゃないかなと思うし。どうしてもこういう不登校の子たちに何かあったときに、またマスコミなんかで弥富市は1個しかなくて通えていない子が多いとあって格好の材料になるのを避けるためにも必要じゃないかなと思っているんですが。不登校については先生たちが皆さん頑張っているとは思いますが、話にならない親とか学校に対してよいイメージを持っていない家庭もけっこうあると思うんですが、やっぱりそういうところに対しては適応指導教室とかそういうところのほうが保護者も話がしやすいだろうし。昨日も講演を聞いていて、ソーシャルワーカー。ビデオソーシャルワーカー。ソーシャルワーカーも本当にいろんなソーシャルワーカーがあって、そういう適応指導教室にソーシャルワーカーがいて、その問題はこういうところに相談するといいよ、こういう適応指導教室へ行くといいよとか、そういうようなことをやってくれたりとか。そういう拠点をこれからは作っていかないと、適応指導教室と学校だけでは太刀打ちできないんじゃないかなと思うことと、今文科省では地域支援本部という、そういう取り組みでいろんなボランティアを募ったりして、学習ボランティアとか環境ボランティアとかを学区毎に作って、地域の人が学校と協力して地域の子供を育てていく、地域の良さを教えていく。大きくなっても地域に戻ってくる、なるべく戻ってくる子たちを育てていくという、そういう取り組みがなされていると言われていいますので、ぜひそういう拠点になる建物を弥富市も作っていくといいんじゃないかなと思います。

- 市長より はい、ありがとうございます。アクティブにつきましては第二アクティブとして市の計画にもちゃんと上がっておりますので、決して消えてはおりませんものですから、よろしく願いいたします。それから地域支援本部、あれ、これって国の施策であったんですよね。学校の空き教室なんかを、放課後利用してというような、地域の人に来ていただいてその講師をお願いしてということも、何かあったような気がしたんですけど。

- 委員より 愛知県はあんまり積極的にやっていないですよ。津島は早くからやっています。実は僕も7年前からボランティアに土曜日だったり月曜日の3時以降だったり、学習ボランティアで行っているんですけど。教員になろうという大学生とかと一緒に勉強を教えたりとかしているんですけど。教えられた子達よりも、ボランティアに行った人のほうが、「やった」というような良いイメージを持つんですが。教えられて、特に3年生なんかは勉強が少しわかるようになったとか、やっぱりそういうのは目に見えてわかりますので、無いよりは絶対あったほうが良いなと思います。
- 市長より 津島なんかはどういった施設でそういうことをやってみえるんですか。場所とか。
- 委員より 神守中は、神守中学校の中でやっておる。鍵とかもボランティアの人が預かって。
- 市長より はい、わかりました。他にご意見がありましたら。
- 教育長より 今の阿部委員の提案、すごく素晴らしいなと思っているんですがね。もしできれば新しいアクティブに、そのアクティブの機能プラス学習支援室だとか、これはまあちょっと、教育委員会とは別に福祉のほうになってしまうかもしれませんけれども、貧困家庭の子の問題だとか学習支援とか、地域の、今の阿部委員さんの言われたように、地域の力を借りながら、ボランティアも交えながらそういう支援ができたらなど、そういう拠点ができると。そこにソーシャルワーカー。今、一人不登校で安否確認ができない子がおるんですわね。学校の先生、それから藤澤さんも行ってくれとるんですけども、ちっとも会えないと。親も会わせてくれないというところがあるんですね。もう何遍も時間外に北中の先生が行ってくれとるんですけども、本当にそういうときにソーシャルワーカーさんがいて、日常からやっていただけないかなというふうに思っております。昭三先生、どうですか。
- 委員より 今日のテーマである不登校の問題。私自身はこの弥富市で一番大きな問題は、不登校の問題じゃないかなと思います。弥富市は比較的家庭環境といえますか、地域の環境だとか学校の施設等についても、よその地区に比べて遜色のないというか、むしろ非常にいい環境のなかで生活を、子供たちはしとるわけですけども、そんな中でやっぱりこの数は多いなということを思います。今の時代の風潮で、特別支援といえますか、障害者への教育はかなりいろんなところでカバーができてきてお



るというか、非常に進んできていると思う。これは弥富市でもそうですし、他の町でもそうですけど。学級の新しい申請だとか、そこへ担任以外の支援員が付くというのがかなり厚く、一人の子に先生が二人付くという場合もあるくらいに厚いんですけども、学校教育の中で不登校の子に対して本当に手薄なんですね。担任の先生がやるしかない。教育委員会の藤澤さんも一生懸命いろんなところで関わっているんだけど、それを手当する人がいないという現状の中で、どんどん数が膨れていっているという気がしています。だから、中学校を卒業して、その状況で卒業していくと、社会へ出ていくということはほぼ非常に難しい。社会の一員としてのそういった訓練をする場がもうなくなっちゃうわけで、引きこもりでずっと、一生引きこもりで生活するという形になっていくとすると、こちらの責任も非常に大きいと思うんですね。

我々としてそうものになんらかの形で手を打てるものは打っていくということは教育委員会としても非常に大きな課題だなということを思っております。不登校というのは、いろいろ要因があると思うんですが、大きく分けるとさっきから出ているように学力不振で自信をなくして、特に進路が近づいてくると学校に行くのを渋るというのがある。それからもう一つはコミュニケーションがうまくできなくて、いじめという言葉で表現されるかもしれませんが、人間関係でうまくいかなくて不登校になっていく。もう一つは、家庭、特に親さんのネグレクトだとか虐待だとか、子供の教育に対しての間違った行動によって不登校になっていく。こういうようなものがあると思うんですけど、それがいろいろあるがゆえに、やっぱりさっきから出ているソーシャルワーカー、エデュケーションアルソーシャルワーカー、スクールソーシャルワーカーと言うんですかね。そういう人がやっぱり市におっていただかないと、なかなかうまくいかないんじゃないかなと、そんな気がしております。いじめでもそうですけれど、早期発見早期対応、きめ細やかな継続的な支援というのが、数を減らす大事な部分だと思うんですね。まず早く気がつく。「この子ちょっと学校に不適應してるな」と早く気づく。これは担任が気づくことですが、それに家庭との連携をとかなんかそういうことをきちんとやっていかないと、いっぺん家に閉じこもっちゃうと、これをもう引き出すことはかなり難しい。結局それがどんどん増えていくことにつながっているのかな。先程、アクティブの話もありました。アクティブ、ぜひとも思うんですが、学校の中にその子たちがおれるような場所をどう確保していくか。そういうこと

も考えていかないと。アクティブにおいやることが必ずしもその子にとっていいとは限らない。学校の一員としておりたいわけなんだけど、おれないという、そういう心境でありますので、そういうのをどうやって順々に慣らして集団の中で生活することの楽しさややりがいみたいなものを感じ取らせていくか。これが非常に、僕は大事な部分かなと思っております。非常にこれは手間がかかるし、時間がかかるというか、そういうものでありますので、それを担任が全部やれというのは実質難しいなということを思います。最後にちょっと余分なことだけでも、私の反省からですけれども、先程からテストの結果というか、学力テストの結果で「平均点」という言い方で今までの学校教育というのはずっと行われてきたんですけれども、あれはできる子にとってはとても嬉しい評価方法というかね。「お、俺はできるがや」と思えるというか。だけどできない子達にとってみると非常に苦痛であると。一つの価値基準としては、僕は大事だと思うんですけれども、学校の中にいろんな価値基準を作っていくかと思えます。それぞれの子が、それぞれが生きがいを感じるとか、楽しいなと思える価値基準を作っていくか、学校の先生、最後はテストでやって、どこの高校に行くかというので、その人間評価というのはずっと昔から我々はやってきたんだけど、これからの世の中は今やっている仕事の半分はロボットがやるという時代になってきたときに、成績がいいからといって良い人生が送れるかといったらそうでなくなる時代になってきているので、そういうことも含めて学校文化を少しいろいろな多様性を持ってその子を見ていくという文化を作っていくか、結局そういう不登校が増えていくということに繋がりがねんとも思いますので、ぜひ先生方の教育観みたいところで、一人ひとりの良さや、一人ひとりの成就感、自己肯定感みたいなものを育てていくためにどうしたらいいのかということ、ぜひ研究してほしいなと思いますね。余分なことをいいましたけれども、いずれにしてもちょっとこの問題は、真剣に対応していかないといかんかと、私自身強く思っております。

- 市長より 県のほうでスクールカウンセラーは週1くらいで、来て・・・。
- 学校教育課主幹より スクールカウンセラーですか。今の所、各小8、中3の11校に週1。それから市でも雇用した形でそれにプラスαで入っていただいている状況です。毎日ではありません。
- 市長より そのとき、ご相談というか、相談は、それぞれ・・・。

- 学校教育課主幹より けっこう、どの学校も非常に、活用頻度が高いのいいのかわかりませんが、いい形で今活用されているというのを伺っています。
- 市長より 不登校の相談も。
- 学校教育課主幹より もちろんです。不登校の相談しかり。もちろんそれも予防が大事なので、そういった悩みがあったときに、駆け込み寺ですよ、ということで相談にのっているということが多いですね。
- 教育長より あの、ところがね、一昨日、海部の愛教組の組合から教育白書というのが送られてきて、子供に、小学生中学生に「あなたは悩みを誰に相談しますか」という統計が出ったんですわね。小学生が一番多いのがお母さん。中学生はお母さんより若干友達というのが多いんですわね。小学生の場合、お母さん、お父さん、友達、先生というのがほとんどですけども、なんとこう、スクールカウンセラーという欄があったら小学生も中学生も1.5%くらいしかないんですわ。1%くらいしか。「あなたは誰に悩みを相談しますか」ってのは。確か、次長さん、そうだったね。
- 教育部次長より はい、それくらいのパーセントでした。
- 教育長より 二人でみて愕然としてね。何も役に立っとらへんっちゃうんかと。不登校対策にすごく文部省お金かけとったんですけれどね。
- 委員より 週に1回来て、たまに来ている人に、そんな相談するなんてチャンスは非常に難しいと思うんだわね。だからね、やっぱりある程度頻度が学校におってくれる人でないと。よっぽど深刻になってからでしかそこへ出会うってことがないわけだわな。それが本当はもうちょっと日常的におってくれる人だと、子供との交流だとかいろんなことがあって相談もしやすくなるとう。そうことがあるんだけど、今形の上ではおるんだけど、なかなか実質役に立つことが少ないと。これが現状じゃないですかね。
- 教育長より 非常に高い時給を払っているわりには、悲しくなります。それだったらもっと、という。
- 市長より 週1回というのもありますし、児童生徒にとってそのカウンセラーさんが合うか合わないかってのもやっぱりありますので。男性女性というのものもあるだろう

し、いろいろとあると思いますけどね。学校でやはり子供たちに居場所をどこかに作ってあげるのも本当に大きなことかなと思いますね。

- 教育長より     そうすると、その居場所を作る先生がおらへんのですわね。結局は教員の定数増というような皆が唱えておることが根本原因となってくるんですけれども。
- 委員より     障害を持った子達の団体というのが、後ろで相当今まで一生懸命やってきたんですね。だから障害に対する理解というのは随分変わりました。平成で始めと終わりでは随分違うと思うんですね。だから同じように、不登校のそういう子たちの現状だとかなんかについてご理解をいただいて、そういうところから何らかのアクションがないと、なかなかそれが形に現れんというかね。だけど、だいたい不登校になっているところは無関心か、劣等感を持ってみえるんですね、親さんは。「うちの子はよう学校に行かん」という形でそれを表沙汰にすることそのものが嫌だというような気持ちを持ってみえるので、なかなかそれが声として出てこない。結局ずっと有耶無耶でいって中学校を卒業をしたらどうしようもないという形で、こう、いってしまうと。そういう人が皆悪いとは限りませんが、色々な問題を起こす中のそういった要素の一つにはなっていると思うんですね。社会不安ね。だから、ぜひ救えるものは救わないといけないと思うんですけれども。なかなか難しいのが現状ですね。
- 市長より     最近、2、3、小学校を見させていただきまして、私が議会等で予算等でも「支援員、支援員」とよく出てきていたんですが、これほど学校に行って支援員が大事だということ、見てやっとなかったというような状況でございます。これは障害がある子供たちに対してということ。今言われたようにそのとおりだと思いますけれども。今障害のあるお子さんというのが、ある意味、個性ということで随分世の中に出てくるようになったように思うんです。それに伴って支援員さんということもあるんですけど、この不登校の問題もこれから大きく大きく取り上げていかないと、ますますこういう子供が増えていったら市としても次代を担う子供たちがどうなっていくのかと大変心配なことですので。
- 教育長より     40歳以上で何万人おるって言ってましたかね。
- 市長より     引きこもり。
- 教育長より     引きこもりがね。

- 学校教育課長より 40万人くらい。
- 教育長より 多く見積もって60万人おるなんて、そんなこと。アクティブに来とる子は皆高校に行ってほとんど無事に通つとるということは聞くんですわね。結局、人間関係が徐々に癒やされてきて行つとると思うんですけれども。こすい言い方をすると、不登校で引きこもりを作っちゃったら、社会扶助をしていかないかと。だけどなんとか人間関係を保って不登校を減らすことは善良な納税者を作るということで。まったくこうくるのと、こうくるのと、市の財政まで関わってくるということが言えるんじゃないかなと。
- 委員より 市長さん、間違いなくこれからね、家庭がそういった子をなんとかしようという形でやることはまずないと思うんですね。皆それを社会が受けていかなきゃいけない、学校が受けていかなきゃいけないとなると、早いとこそういった体制を作っていないと本当に数がどんどん増えていってしまいますね。
- 市長より 先進地という言い方が正しいかどうかわかりませんが、そういった事例のいいのがあれば参考にして、弥富市としても対応していくべきかなと思います。  
議題2がこれくらいとさせていただきまして、議題3の意見交換も同じようなことになってしまっているわけでございますけれど、他に何か議題としてあれば、いただきたいと思います。よろしく願いいたします。特別、今のお話でいいでしょうかね。
- 教育部長より そうですね、そのまま、せっかくの機会ですので、いろいろお話いただければ。
- 市長より 地域ではこんなことになっていますとか、なんでも構いませんので。よろしいですかね。ではまたありましたら教育委員会のほうにでもお届けいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。ではこれで、議題のほうを終了させていただきますので、事務局のほうへ進行をお返しします。

.....○.....

#### 4. その他

- 学校教育課長より はい、ありがとうございます。それでは議題を終了させていただきました。4. その他ですが何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。あ

りがとうございます。それでは以上をもちまして、令和元年度弥富市総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。